

インタビュー

## 社会福祉学部開設 20 周年記念企画 「社会福祉学部の源流を探る」

岩田 啓靖 (山口県立大学名誉教授)  
三島 正英 (社会福祉学部教員)  
聞き手 山本佳代子・水藤昌彦

### 本企画の趣旨

社会福祉学部開設 20 周年記念として本号で特集をするにあたり、本学部の創設に深く携わられた岩田啓靖本学名誉教授 (元学長)、開設準備の主要な担い手のおひとりであった三島正英本学教授から、「社会福祉学部の源流を探る」と題して、当時の様子をお話いただいた。今回、このお二人のお話を伺うことにした理由は、学部創設の頃の時代状況、基本となった思想や理念について、関わられた当事者から、直接にお聞きし、記録にとどめておきたい、そして、それを本学部の今後を展望するうえでの糧としていきたいと考えたからである。

本学部の歩みは、これまでも折に触れて記録に残されてきている。まず、2000 年刊行の本誌通巻第 6 号において、「社会福祉教育の現状と課題」をテーマとした特集が組まれた。2004 年刊行の本誌通巻第 10 号には「社会福祉実習教育の 10 年と今後の展望」が特集され、社会福祉実習教育の回顧と展望が示されている。2005 年 3 月に刊行された「山口県立大学社会福祉学部 10 年のあゆみ」には、歴代学部長による寄稿文に加えて、社会福祉学部社会福祉学会 (学内学会) を中心に編纂された 100 名を超える卒業生からの実践報告が掲載された。また、2006 年 3 月刊行の本誌通巻第 12 号には、「実習教育の 10 年を振り返って」と題する座談会の記録が収められている。

今回のインタビューは、上記の各種記録とは、少し異なる切り口のものとなるように心がけた。具体的には、実習教育、社会福祉教育自体に焦点を当てるというより、本学の歴史と社会福祉学部開設につながる流れ、学部開設準備から初期の運営に至るまでの過程、開設から 20 年を迎える現時点において考えられる今後に向けての展望、などについてお聞きすることに主眼をおいた。

### インタビュー① 岩田啓靖名誉教授

聞き手・構成：紀要編集委員 山本佳代子・水藤昌彦

#### 社会福祉学部開設前のころ

社会福祉学部が開設される前、1990 年頃の本学は文学部と家政学部の 2 学部体制をとっていました。これらをもとに、大学の新たな姿を構想しており、私はそれに大学整備の責任者として深く関わっていきます。当時、看護学部を新たに開設することは決まっていた。看護学部の新設にあ



たって、日野原重明先生にご指導をいただいております、このことは私どもの大学にとっては大きな助けとなりました。日野原先生からさまざまなお話を伺い、看護とは何かを考えていくなかで、「人は看護する故に真に人間であるにたりうる」という考えを固めていきました。いわば、ホモサピエンス、ホモルーデンスにつながるような、「看護する人」というイメージです。

ここでいう看護とは、いわゆる看護学という学問領域に限定されるような狭いものではなく、介護までを含んだ、英語でいう「ナーシング」というほうが適切な、より広い概念です。このように広い意味でのナーシングを中心概念とした研究教育を行うという視点から、看護学部を構想していったわけです。ここでは、治療に焦点をあてた、医学部に付随する看護教育とは違う、自立した看護、あるいは社会福祉を含んだナーシングを目指しました。これは、何も従来からの医学部を中心とした研究教育の流れを否定するものではなく、むしろ、それらを大切にしながら、それと並立する人間科学に立脚する看護、福祉を目指そうとしたわけです。この点は、日野原先生とも考えが重なっていました。

この頃は、介護保険の導入をはじめとして、福祉への注目が集まりはじめていた時期です。社会福祉士、介護福祉士の国家資格が整備され、各地で社会福祉学部が開設されていました。しかし、私たちが本学における社会福祉学部を構想したときには、国家資格のための教育というよりは、介護しつつ生きる人を育てるということを重視していました。ただ、この視点について、学内外からの理解を得ることは必ずしも簡単ではありませんでした。看護については、すでに看護師が医療現場で活躍していたので比較的イメージされやすかったと言えます。私自身も看護学校の学生さんや看護師さんと交流する機会がそれまでにもあり、日本における看護教育の状況もある程度は判っていました。しかし、社会福祉士は、当時、社会福祉は行政のなかにあるというイメージで捉えられている面があったので、具体的な姿を思い浮かべることが難しかったという事情がありました。

## 社会福祉学部開設時の理念

このように看護学部を構想するなかから、介護へとつながり、それが福祉へと流れになっていくわけです。次第に、医学部的なドミナンスとは異なる、人間学として健康を考えるという理念が明確になっていきました。メディカルの下位概念としてのコメディカルではなく、治療に責任を持つ専門家である医師と、人間として生きる上での課題を見つめる専門家である看護師や社会福祉士のパートナーシップによって、人の健康に関わるという考え方です。両者による連携・協働のモデルでした。こうして、人の健康に着目したことから、そこにつながる諸領域として、看護、栄養、福祉という構成に一貫性を見出すことができます。

そして、それらの営みに国際的な視点をもたらすという理由から、国際系の学部を加えるという発想をしました。このようにして構想した、看護、栄養、社会福祉、国際という学科構成は、それまでの本学の流れであった、文学と家政学の流れにもつながっていくものでした。

国際文化学部以外の学部でも研究教育の国際化を強く意識しましたので、それにふさわしい教員を採用したいということになり、さまざまに手を尽くして人材を探しました。その結果、マーシャ・ペトリニ先生を教授としてお迎えすることができました。ペトリニ先生はアメリカのご出身で、長年、看護教育に携わっていらっしゃいました。中国における看護教育の立ち上げにも関わったご経験があり、われわれが本学への赴任をお願いしたときには、世界保健機構（WHO）に勤務しておられました。最初は、日本の状況はよく判らないというようなお返事があったりもしましたが、最終的には快諾いただいたわけです。

近年、介護職員の不足などの問題によって、外国人による介護福祉士養成が行われています。われわ

これは、今から20年以上前に、こうした状況が到来するであろうことも視野に入れていました。その意味でも、本学の国際化推進には大きな意味があると考えていました。国際化などというと、どうしても都市部で取り組まれる問題であり、なぜ山口県で、しかも県立大学が取り組むべき課題なのか、という意見も聞かれました。しかし、山口県と韓国、中国をはじめとする東アジアとの距離の近さ、山口県が経験していた急速な少子高齢化などの点を考えると、こうした国際化の動きを地方で取り入れ、直接、海外と関わる教育研究を行うことには大きな意味があるはずでした。このように、海外と実務レベルで交流する重要性を私自身は強く感じていましたが、残念ながら、この考えはなかなか理解を得られませんでした。

### 社会福祉学部開設時の課題

社会福祉学部を創設するにあたっては、さまざまな課題があり、それらに順に対応していくのですが、なかでも苦労したのは学部長をお願いできる先生を見つけることでした。社会福祉系学部での学部長のご経験がある先生に就任を依頼する必要がありましたが、この頃は全国で社会福祉系学部の開設が相次いでいる時期であり、お願いできるような方には学部長への就任依頼があまたあるといった状況でした。学部開設準備は着々と進んでいきましたが、肝心の学部長候補者が決まりません。そうしているうちに時間は経っていきます。



当時、日本女子大学の創立者である成瀬仁蔵先生が山口市のご出身であるというご縁から、学部開設準備にあたって、一番ヶ瀬康子先生にさまざまなご助言、ご支援をいただいていた。その関係から、一番ヶ瀬先生が奔走してくださり、最終的に上田千秋先生に学部長就任を承諾していただきました。これはほんとうに有難かった。

今でも鮮明に記憶していますが、上田先生ご就任のめどが立ったときには、当時、県の側で学部設立の責任を負っていた担当者と抱き合って涙を流しました。学部開設に関わる準備は、その何年も前から県などの関係機関と調整しながら進められてきている訳ですから、最終段階に至って学部長候補が決まっていない状況にあるというのは、たいへんなプレッシャーでした。冗談半分にはありますが、宿泊していた東京のホテルで、「ここにきて候補者が決まらなければ、窓から飛び降りよう」と、その担当者と言いつたのをおぼえています。今では笑話ですが、当時はそれほど厳しい状況でした。

それはさておき、上田先生に学部長をお願いできることが決まり、そこから司法福祉の佐野健吾先生、老人福祉の西澤稔先生、教育学の門前貞三先生など、学部開設認可時に採用出来た教員へとつながっていきました。その意味で、上田先生に学部長として来ていただくのが決まったことによって、学部創設時の教員体制の整備が大きく進みました。

全学的な視点に立つと、別な課題もありました。それは看護栄養学部、社会福祉学部、国際文化学部の三学部体制を作っていくなかで、それぞれのファカルティー相互の凝集性、集合性をどう考えるのかということでした。すでに述べたように、各学部を構想するにあたっては、文学部、家政学部の流れをくむ形で人間学を基底とする広い意味での看護、ここで言うナーシングを担う人材を養成する、その営みを国際化させていく、という理念がありました。その意味で、新たに開設された3つの学部には、人の健康を求めるというつながりがあるのです。このつながりは理念のレベルだけに留まるものではなく、物理的な施設レベルでも追求しようという動きもありました。この頃には、新キャンパスへの移転が計画されはじめていましたが、移転後には、看護学科、栄養学科、社会福祉学科の教育研究棟を渡り廊下でつなぎ、中心に実践型の総合大学院があるというようなデザインを考えたりしました。実際の学

部学科間の集合性はどうだったのか。この点は、いま現在大学に勤務していらっしゃる関係者の意見を逆に聞きたいようにも思います。

また、もう一つの課題は、教育研究と実践現場での営みの連環をどのようにして作るのか、ということでした。私は、行政、大学、看護あるいは福祉現場の三者間の垣根が低く、これらの各領域を必要に応じて人材が移動できるような相互の関係が望ましいと思ってきました。そのほうが、それぞれの領域において、お互いのおかれた状況をより良く理解できる人材を育てていくことができ、それが先ほどからお話ししているナーシングの向上につながっていくからです。しかし、これを実現するのは難しいことでした。

## これからの社会福祉学部

これまで述べてきたように、文学部と家政学部を改組し、最終的に社会福祉学部、看護栄養学部、国際文化学部を開設していくにあたっては、教養性の高い人間学を学び、輝くナーシングを実践する人材を養成すること、その営みに国際化を融合させ、地方、地域のなかで輝くような営みができる人を育てることを理念としました。

今回、学部開設20周年ということで、このようなお話をしてきましたが、私は社会福祉学部にとって、今は学部として熟成していく途上にあるのだろうと考えています。ひとつの学部を開設し、それが展開していく過程は、一本の木を植え、育てていくようなものです。これには長い時間がかかるのです。

社会福祉学部をはじめとする各学部の開設を構想していたときにも、われわれの理念を具現化していくには、30年、50年といった単位での時間が必要になるだろうと予測しました。その意味では、中間地点にやっとさしかかったというところでしょうか。われわれが構想した理念について、中間的な総括をする時期に来ていると言えるでしょう。社会福祉学部において、これからどのような研究教育活動を展開していくのか、どのような学びの場を作り上げたいのか、いまいちど、改めて、考えてみていただければと思います。

## インタビュー② 三島正英教授

聞き手・構成：紀要編集委員 山本佳代子

水藤昌彦・長谷川真司



### 社会福祉学部創設との関わり

山口県が山口女子大学整備基本計画を策定するなか、学内に将来構想のプランを考えるための企画委員会という組織が設置されました。文部省（当時）などの教育行政、県政の将来展望、そして大学の展望などが、縦糸、横糸として、さまざまに絡まる状況でした。私自身も助教授という職にあり、年齢的にも脂が少し乗りかけてきたところで、作業の一翼を担えということになりました。もちろん、それは私だけではなく、現在、社会福祉学部在籍されている先生では、赤羽潔先生、青木邦男先生、国際文化学部の松田理先生なども関わられました。

将来に向けての展望、大学全体をより進化成熟させていく方策として、看護学部の設置、家政学部と

文学部の改組など、いくつかの主要課題を検討する分科会が動き出しました。当初、私は文学部の改組作業に関わっていました。その頃の文学部は、国文学科と児童文化学科の2学科制、入学定員は各学科40名の計80名、4学年で320名という構成でした。私の専門領域は心理学であり、当時は文学部の児童文化学科に籍を置いていました。今後、公立女子大学の文学部として維持発展できるだろうかということについて、私自身にも疑問がなかったわけではありませんでした。国文学科は文学部のなかでの立派な正統性があるのに対して、児童文化学科の性格は若干あいまいであり、前身が保育科でしたので、どうしても第二教育学部的な色彩が強くなっていました。児童文化学科では、8割程度の学生が教職に就き、活況を呈していましたが、それもだんだんと先細りしていくことが予測されており、文学部として、今後の展開、展望を考えるように迫られていると認識していました。

山口県としては、時代の流れのなかで、国際化、高齢化、情報化社会への対応などが主要な政策課題でした。こういうものを反映しながら、文学部をどのように改組、展開していくかを検討しました。その結果、国際化と高齢化に対応していくような学部として国際人間学部を開設し、そこに国際系と人間系という2学科を設けることを構想しました。当時は、文部省が大学の総定員抑制策をとっており、学部新設が認められない状況でした。そこで、文学部を国際人間学部というかたちに転換させて、そのなかに県の国際化の政策課題に対応する国際系の学科と、高齢化の課題に対応していく人間系の学科を設けようということになりました。なお、看護については、文部省の総定員抑制策の対象外とされており、全国で次々に看護系学部が開設されていたので、本学でも高齢化への対応として看護学科新設が決定されました。

私は、本学の教育理念、つまり、女子専門学校以来の伝統である「人が人を愛し、慈しむ」「人が人を世話していく」という点に着目し、その具体的なかたちとして、看護、介護、福祉領域に展開すれば、論理的整合性があると思っていました。これらのなかで、看護学科の新設は先述したようにすでに決めていましたし、介護は看護との近接性が高いので除外されました。国立大学がやらないこと、この山口の地において、公立大学である本学が存続していくための個性を担保する数少ない領域であるということも理由となり、社会福祉領域を選択したわけです。

自分のなかでも名称に関する記憶は曖昧になっていますが、当初は「国際人間学部」として「人間福祉学科」と「国際学科」を開設するという計画を立てました。1学科の定員を80名ずつとして、1学年の合計を160名、つまり文学部の2倍にしてスケールメリットを得ることも構想しました。岩田啓靖教授（後に学長）、熊本守男文学部長を先頭に文部省との交渉や作業を進めていきましたが、この過程は難航しました。本学幹部が文部省へ行き、話し合うたびに、「国際人間学とは何か」を問われたのです。しかし、やれども、やれども、この概念がうまく整理できない。国際人間学とは何かを議論するのですが、包括概念としての「国際」と「人間」を足しただけで、共通の学部内アイデンティティのようなものをつくることができずにいました。また、学位の名称をどうするのかというような、実際的な問題もありました。

そうこうしているうちに、認可申請や各種の行政スケジュールなどの時期が迫ってきます。そんなとき、文部省から「あなた方のような考えなのであれば、この際、国際系と福祉系の2学部に分けたらどうか」という提案があったのです。これは、われわれにとってみれば渡りに船のような話であり、総定員抑制、学部新設に対する厳しい見方があるにもかかわらず、文部省がそう言うのであれば、この際、一気に行こうとなりました。

熊本学部長の指揮のもと、社会福祉学部を立ち上げていく検討を始めました。チーフは心理学専任の坪郷康先生、それに経済学の溝手芳計先生、法学の藪本知二先生、さらに私を含めた若手数名が加わり

ました。このグループでは、社会福祉学部開設にあたっての問題、将来展望、山口県における福祉系の養成課程の状況などについての検討を重ねました。こうした準備作業の一環として、当時、山口県の周南社会福祉事務所長をしていらっしやった山本圭介先生に真夏の暑い時に大学までお越しいただいて、お話を伺ったことを懐かしく思い出します。その頃、県内における福祉関係の人材養成は、専門学校、短期大学の介護関係を中心として細々と行われていました。それもあって、山本先生は、県立大学が福祉領域を展開することについては、大いに賛成すると言われていました。のちに、山本先生は3代目の学部長をつとめられますが、この時点では、ご自身が本学に研究室を構えることになろうとは考えてもいらっしやらなかったかもしれません。

ここで、社会福祉学部長をどなたにお願いするか、という大きな問題が生じました。国際人間学部というかたちで構想した時点では、九州大学にいらっしやった宗教学がご専門の戸崎宏正先生が学部長候補でした。国際系学部の学部長は戸崎先生にそのままお願いすることができますが、社会福祉学部を申請するために必要な学部長がいません。そこで、岩田学長、熊本学部長以下、大学幹部、あるいは県の幹部を総動員して、適当な方を探しましたが、なかなか適任の方に出会えませんでした。当時、顧問として社会福祉学部新設にご尽力いただいていた、日本女子大学の一番ヶ瀬康子先生、厚生省にいらっしやった京極高宣先生などにご相談しながら、最終的には、佛科大学から淑徳大学に移っていらっしやった上田千秋先生を初代学部長にお招きできたのです。

### 学部開設の当初に目指した方向性

今後、いかに時代が変わろうとも、教育研究の柱とでもいふべきものが揺れない、ぶれないということを目指しました。私自身、かつての児童文化学科では、児童文化学とは何かというようなところで散々苦勞したので、いわば普遍的に変わらぬ価値というものを指向していく教育と研究ということでした。また、本学の歴史、沿革を背景として考えたてみると、「人が人の世話をする」、「面倒をみる」、「愛し、慈しみ合う関係」というものを教育研究の中核として据え、それを福祉という概念でくくることは必然でした。そうすれば、現場というフィールドがあり、普遍的な価値として時代や文化に左右されない営みとしての柱が固まる。そのように考えて、社会福祉を指向したわけです。まず柱には、そういうものをしっかり置いておきたいなと思っていました。

正直に申し上げると、私自身、社会福祉の現場をあまり知らなかったですし、心理学が専門だということもあり、最初に社会福祉として発想したのは専門職の養成というよりも、もっと素朴に人という存在を理解していくというようなことを考えたわけです。そこから、さまざまな方の知恵をお借りし、あるいは先進大学、福祉分野の先輩校へのヒアリングなどに行くなかで、専門職養成を目指す方向性が明確になっていきました。大学の整備基本計画では大学院の整備も構想されていたので、学部教育としては、専門職教育を徹底してやっていこう、専門職養成ができれば立派なものだと思ったのです。専門職養成の徹底と言うと専門学校のように聞こえるかもしれませんが、決して、そうではありません。医学部に範をとれば、まさに専門職教育カリキュラムの最たるものであり、学部では徹底的に専門職を養成するための教育が行われています。そこで、社会福祉学部においても専門職養成のための教育を徹底し、研究は大学院で保障していく、発想の出発点は、そのようなことでした。

専門職養成を徹底するという視点から最初のカリキュラム作成時に考えたことは、実習、体験を重視する教育プログラムを提供していくことです。全国で看護学部の設立が続いていた時期に、看護の世界、現場では学部を卒業した看護師に対して、「頭でっかちの看護師が来てもしようがない」、「まず現場があるんだ」という批判の声がひじょうに強くありました。私自身もその点を意識しつつ、社会福祉

の場合も似たようなところがあるのではないかと考えていました。また、さまざまな福祉系の先輩校へヒアリングに行った際に少なからず見受けられたのは、現場、実習よりも、どちらかという理念中心、ディシプリン中心の傾向が強いということでした。それはそれで、一つの意味はあるのですが、本学が地域のなかで求められているのは、やはり実践力を持った人材の養成であると思ったのです。そこで、徹底して、まず、体から入っていく、実習重視の教育をやっていこうと考えました。実習を通して学生が自ら課題を見つけ、講義科目などで補っていくという形をとることで、講義と実習両者のバランスのドミナンスを、従来とは少し変えて、むしろ実習から、体から入っていくことを意識したわけです。

そのような経緯から、山本先生には無理を言って本学に来ていただき、開設当初、すぐに実習会議というものを組織して、実習重視の教育を進めました。看護や福祉系の大学が増えていた時期でしたから、実習重視を掲げることは、本学の独自性を打ち出すことにもつながりました。実習を担える教員が少ないという状況のなか、山本先生や加登田恵子先生のお二人が、実習会議の基礎をつくってくださいました。学生に実習を経験させ、トラブルなく終えるためには膨大なエネルギーが要るのは、当初からわかっていましたので、実習準備には入念に取り組んだわけです。山本先生による事前学習、指導などは、本当に見事でした。実習教育については、どこにも引けを取らない体制を創り上げたというのが、本学部の最初のアイデンティティの確立です。そのために、実習系の先生たちには相当に大きなご尽力をいただいたというのが当時の実態でした。

新設された社会福祉学部に対する県からの要請、地域住民の方々からの要望として、大学が福祉教育を展開することに対する期待はあったと思います。山口県は、その当時、既に高齢化率がひじょうに高くなってきており、高齢化社会が間近に迫っているという状況でした。日本社会事業大学の橋謙策先生などは、宇部をはじめとする山口県内をフィールドとした研究をされていました。残念ながら、こちらの実力などの問題もあり、そのようなところうまくフィット、連携することはできませんでした。ただ、橋先生からは、本学の応援団長のようなかたちでご支援していただいています。それは草平現社会福祉学部長が、当時、県からの派遣職員として本学に籍を置きながら、まずは橋先生のところで地域福祉、橋イズムを学んでくるといったようなかたちにも現れていました。橋先生は、早くから宇部市教育委員会や周防大島と関わっていらっしゃいましたので、そのような流れのなかで、本学部の地域福祉的な連携も比較的早くから取れていたと言えるかもしれません。

### 学部開設時の様子：強み、課題や困難

発足当初から出願状況は好調で、推薦選抜も山口県全域から旺盛な応募がありました。地域福祉の担い手を養成するという本学部の教育理念にとっては、当初から心強い状況となりました。また、入学してきた学生の皆さんがよく頑張ってくれました。初めての社会福祉士の国家試験のときも、われわれ教員の側は不慣れでしたが、一定の成果を上げてくれました。その後、実習会議の教員を中心に、国家試験対策のノウハウが蓄積されていくにつれて、今日に至るような状況ができてきましたので、このあたりは順調に推移してきたと思います。

また、学生指導のきめ細やかさも本学部の一つの伝統です。20年前の学部開設のときから、かつての大学とは違うということ意識して、1年次に基礎セミナーを開講しました。当時は「基礎演習」という名称でしたが、チュートリアル機能を重視しました。高校から大学へのソフトランディングを図るとともに、1年生の時点からだいたい学生10名を1人の教員が担当するというかたちで、きめ細やかに学生をフォローしています。2年生以降は、それが実習のグループに引き継がれ、3年生からは専門演習のグループへとつながるといえるのは、今と同じかたちです。これが特色GPの採択へとつながった

わけです。

一方、最初のカリキュラム作成にあたっては、いろいろな困難がありました。当時の学部教員の構成は、必ずしも福祉の専門家が多かったわけではなかったもので、あっちに聞き、こっちに聞きという状況でした。学部開設の当時、日本社会福祉学会の会員は、坪郷先生、藪本先生、二村克行先生だけだったので、急遽、私も含めた他の教員10名くらいが入会しました。新設なので、やむを得ませんが、科目運営のノウハウなどでも、ぎくしゃくしたことは事実です。ただ、そうは言っても、「みんな、よく頑張ったな」と思います。新設社会福祉学部の1年生を担当しながら、文学部に兼任として籍を置き、旧文学部の2～4年生も教えるという形でカリキュラムを並行して走らせていくので、正直、大変な状況だったのです。わが身も含めて、赤羽先生、青木先生なども同じ状態でした。1年目の社会福祉学部については基礎演習だけでしたが、2年目、3年目と進むにつれて、両学部のゼミなども担当しましたから、一部に相当な負担があったことは事実です。

もう一点、学部運営に関する課題もありました。当時、私は学科主任、今でいう学科長として、4年間、学部長である上田先生の補佐役を担っておりました。上田先生は、ある意味、お客さまとして本学にお越しいただいていたので、あまりご負担を掛けられないという事情がありました。学部はできたけれども運営体制はまだまだ十分に整っていない面もあり、さまざまなマネジメントに相当なエネルギーを注ぐことになりました。学部事務の補助をお願いしていた岩花とし江さんと2人で、学部長室で今でも使われている湯呑やコーヒーカップを揃えることまでやる必要がありました。また、その頃はコピー機が全学に1台だけ、本館事務局の横に設置されていました。それでは不便だとなり、社会福祉学部のある4号館内に、学部の経費でコピー機を1台導入したのですが、学部予算の費目立ての関係から契約したのに払うお金がない。どこから払おうかと、学部と大学事務局、業者の三者で話し合いをしたこともありました。

これらは、ある意味、誰でもできる苦労ですが、こうした運営の苦労に始まり、次から次に、いろいろな問題が生じました。今では笑い話になりますが、各種規程類を整備するのは大変でした。学部教授会運営など、多岐にわたる規程を作るのに土日のほとんどを費やしました。年度当初の「学部教授会の運営方針について」や、入学試験の合否判定、補欠合格者補充の原則、入学者数の確定、受験者数の確認といったルーチンなど、当時、私の作成したマニュアルのうち、今でもそのまま生きているものもいくつかあります。

また、学部内の組織編成も課題でした。前述したように、実習教育重視の流れから実習会議を設置しましたが、これとは別に学科会議レベルの組織も必要となります。しかし、社会福祉学部は1学部1学科制ですので、学科会議を設置すれば、教授会と同じメンバーになってしまいます。そこで、教務会議を活用することにしました。複数学科制であれば、学科会議で学科内の意向や学生指導などについて協議しますが、そのような位置付けとして教務会議を組織しました。

それから、4年目の完成年度に向かって、人事についての規程、とくに昇任や採用の規程などを整備していくのも難しい課題でした。当時は教育公務員特例法という時代背景もあり、教授会が強い人事権を持っていました。形の上では教授会は審議機関なのですが、当時、最年少の教授であった私がここで合意形成を図っていくのは、なかなか大変でした。そのような苦労をしながら、なんとか基礎ができあがっていきました。

このような学部運営にまつわる課題に加えて、障害学生の受け入れについても当初は戸惑うことがありました。われわれ教員が未経験でしたから、点字を教えていただいている中村實枝先生の書かれた書籍などを読み、中村先生が大学の入学試験でどういう苦労をされたのか、また、大学側が受け入れにあ



たってどんな工夫をされたのかなどを学びながら、試行錯誤で障害学生支援のノウハウを蓄積していきましました。聴覚障害のある学生もいましたが、ノートテイクをつけたものの、思わぬトラブルが発生したこともあります。これは「私が」というよりも、実習会議、教授会の全員が協力してくれたので、今日までスムーズに進んできています。一番多い時には、車いすを使用する学生が1学年に3人いたこともありましたが、個々のケースへの対応を通じて、具体的なノウハウを学んだと思います。

### ありがたかった学生の存在

そうは言いながらも、設置の頃に経験した、運営に関するさまざまな苦勞やトラブルは想定内でした。今となっては、力の至らなさを反省するようなこともたくさんありますが、当初から学部のなかに教育に対する熱心さがあった点は、ほんとうによかったと思います。

自信をもって言えるのは、間違いなく、学生に助けられたということです。カリキュラムの不備、教授力、就職指導、資格取得に向けての体制づくりなど、教員が至らなかったところを、学生が自分たちの頑張りで成果を出してくれました。そういう意味で、学生に助けられたという思いがずっとあります。ほんとうに良い学生諸君に恵まれました。「われわれ教員が、この学部を立派にした」と思わせてもらっていますが、そうではなくて、学生たちがしっかりと支えてくれた、教員の至らなさをカバーしてくれたというのが本当のところだと、ここは本音でそう思っています。これまで20年間、毎年80名が卒業したとして、1,500人を超えようとする学生諸君、一人一人に本当に助けてもらったという思いは強いですね。これが、本学部、ひいては本学の財産であり、これからも絶対に守っていくべきことだと思います。教育というものを大事にしなければいけないと、改めて感じています。



### 共学化というエポック

社会福祉学部を展開していくなかでの一つのエポックは、1997年の本学の共学化です。「山口女子大学五十年史」にもある通り、この時点までは女子教育がメインストリームでしたから、どのようにして共学化に対応するかは大きな問題となりました。私自身は社会福祉学部を展開しようと思った瞬間、共学化は時間の問題だと思っていました。公立の女子大学で社会福祉を展開するというのは、論理的に説明がつかなかったからです。

共学化の設計を考える際の原点は、本学の女子専門学校以来の理念でした。基本は男であろうと女であろうと、「人が人を愛し、慈しむ」という人との関わりがあり、人は地域で暮らし、人の暮らしがそこで営まれていく、これをわれわれの教育の原点とするのは変わりません。共学化し、男子学生が入ってきたときに、この理念を揺るがないものにしていくためには、どうするか。男子学生に魅力的な学部をまったく新たに開設する方向性もあり得ましたが、われわれはそれを選びませんでした。これまで営んできた、女子教育によって培われてきた価値を、今度は男性に開放し、男性も参加させていくのが我々のエッセンスでした。そのために、「人間性の尊重」「地域社会との共生」「国際化への対応」「生活者の視点の重視」という4つの理念を定めようということになり、2007年の学部再編成の時には、この理念を敷衍していくかたちで進めました。われわれの守備範囲を超えたところは少し枝を落としていく、というかたちで4学部を3学部にしましたが、それは、この理念があったから出来たのだと思います。

ただ、残念ながら、思ったように男子学生の数は増えていないのが現状です。その理由の一つとして、あらゆる設備、施設が女子大学時のままなので、グラウンドに400メートルトラックが確保されていな

い、硬式野球部の練習設備がないなど、キャンパスライフ全体に質の問題があると、個人的には考えています。余談になりますが、これは本学が直接に整備しなくても、「スポーツの森」といったような公共施設を借りることによって解決できるのではないかと考えているところです。

## これからに向けての展望

学部教育では、徹底して専門職養成教育にこだわるという方向性で考えてきたとお話ししましたが、大学である以上、研究機能が必要となりますので、これは大学院で担保していく必要があります。とりわけ、本学の進化成熟を視野に入れると、やはり博士学位を出す大学にまで成長させていきたいというのが私の夢でもあり、本学における学部の再編、新設に関わる一連の作業に携わって以来、自分を支えた一つの理想でもありました。

私自身の学生生活を思い返してみても、キャンパスライフを含め、本学の学生諸君が置かれている状況があまりにも貧しいと感じていたのです。これを改善していくのは、世代の責任として、われわれに課された仕事であると思っていたので、大学の進化成熟を旗印にしながら、学部の整備のみならず、大学院、とりわけ博士課程の整備、キャンパス整備を中心としたハード面での改善に取りかかりました。だいたい体制は固まってきたので、あとは次の世代の方たちが、ここを運営していかれるようになります。継承発展というより、皆さん方、若い教員が新しい社会福祉学部をつくっていく営みとして、より発展させてくれるといいなと思っています。

繰り返しになりますが、私は、自分の解釈のなかで社会福祉学部を立ち上げました。「山口女子大学五十年史」にあるような、昭和16年の山口県立女子専門学校創立時の理念が、そのまま現在につながるわけではありません。もちろん、その当時、社会福祉学部が構想されていたわけでもありません。ただ、創立時からの理念の本質にあたるエッセンスを、時代と社会の変化に合うように、私なりにアレンジしてきました。具体的に言えば、やはり山口県立女子専門学校は女子高等教育機関として、「女子」を全面に出しながら、しかし、そのなかに「人が人を愛し、慈しむ」というところの「人」の存在の本質に関わるところが謳われていたわけです。これを時代と社会の変化のなかに組み入れることにより、家庭での女性の営みが、社会化という流れに乗ってくるのです。

そして、女子専門学校が短期大学になり、保育科、食物科、被服科、教養としての国文科が置かれ、これらが女子大学となりました。さらに文学部と家政学部に分かれるなかで、児童文化学科が設けられ、20年の時間を経て、社会福祉学部、あるいは看護栄養学部というかたちに広がっていったわけです。人が人を世話することが、子どもだけではなく、高齢者までを含め、地域へと広がっていく。あるいは、国文学科が単なる女性の教養から、地域の国際化へと展開していく。本学は、時代と社会の要請に、うまく適応しながら、女子教育によって培われてきた理念のエッセンスを活用し、これを継続的に取り入れながら変化を遂げてきました。1941年以来、ずっとわれわれが大事にしてきている、人間の存在の本質に関わることを、さらに継承発展していく、時代に合うように改編しながら展開していく、ということが、私の考えた福祉への展開です。これは、あくまで三島の山口女子大学、山口女子専門学校発展論です。私は、それがフォーマルなものであり、基本的にオーソドックスな本学の発展形だと思っています。しかし、必ずしもこれだけにこだわることなく、これまでの延長の上に、皆さん方なりの学部展開を考え、新たな時代の要請に合うように、つくり変えていくという作業をしていくことも、今からの課題だと思えます。

## インタビューを終えて

今回のインタビューで聞き手をつとめて、当時、日本の大学が置かれていた時代背景、本学の状況、本学部が開設されるまでの経緯など、改めて、多くの新たなことを知った。なかでも印象的だったのは、現在の社会福祉学部の源流が1941年に開設された山口女子専門学校にあると確認できたことであった。

岩田先生の言われた、広い概念としての「看護」「ナーシング」、三島先生の用いられた「人が人を愛し、慈しむ」という表現、それぞれの言葉は違うが、それらのいずれもが「ケア」につながっている。そして、他者へのケアという理念が、女子専門学校、女子短期大学、女子大学、それぞれの時代を経て、社会福祉学部を含む、現在の本学に至るまで、一貫して連綿と受け継がれ、存在している。お二人からお話を伺ったことで、大学教育における理念の重要性を再確認するとともに、果たして、いまの自分たちがそのような深い思考をもち、広い視野に立って、本学部における教育研究に取り組んでいるのかどうか、問い直されていると感じた。

開設から時間が経つにつれ、大学教育や社会福祉教育を巡る時代背景の変化、教職員の入れ替わり、カリキュラム改編などによって、当時の本学部の様子を知ることが難しくなっている。いま、このタイミングで本インタビューに関わったことは、それらを再確認するためのたいへんよい機会となった。過去の経験から学び、それをもとにしながら、将来に向かっての社会福祉学部の展望を自分たちなりに考えていきたい。

(山本 佳代子・水藤 昌彦)

